

彙 報

◎ 二〇二三年度大会（二〇二三年八月五日）

コロナウイルス感染防止のため、大会はオンライン形式（Zoom）で開催されました。

【研究報告】

野口飛香留（大学院文学院・博士後期課程・日本史学研究室）

「北朝天皇・足利義満と陰陽師」

長瀬 篤音（大学院文学院・博士後期課程・東洋史学研究室）

「後期タイムール朝における政権樹立の一例―スルターン・マフムード・ミールザーを中心に」

大出 尚子（日本学術振興会特別研究員（RPD））

「『満洲国』における皇産の所有権―「帝室財産管理令」の制定を中心に」

【講 演】

白木沢旭児（日本史学研究室・教授）

「北海道大学附属図書館所蔵『和文バンフレット』について」

佐々木文昭（北海道武蔵女子短期大学・名誉教授）

「鎌倉幕府北条経時期における訴訟制度改革と引付」

◎ 二〇二三年度総会（二〇二三年八月五日）

大会に引き続き続いて開催された総会で、北大史学会の委員・会計監査が以下のように選出されました。

〔委 員〕 橋本雄（日本史学教員）、吉田拓矢（日本史学教員）、

吉開将人（東洋史学教員）、長谷川貴彦（西洋史学教員）、

松寫明男（西洋史学教員）、高瀬克範（考古学教員）、

楊芸帆（日本史学院生）、富士貴央（西洋史学院生）、

彦山明志（東洋史学院生）、加賀美宏輔（考古学院生）

〔会計監査〕 川口暁弘（日本史学教員）

次に二〇二二年度の会計報告が行われ、以下の通り承認されました。

I 収入の部

（内訳）

前年度繰越金 一、四〇五、〇〇四円

二〇二二年度収入 三三八、七五八円

【細目】

会費 三三三、〇〇〇円

抜き刷り代 二、七五〇円

広告代（北大出版会） 五、〇〇〇円

会誌販売代金 八、〇〇〇円

銀行口座利息 八円

合計 一、七五三、七六二円

II 支出の部

（内訳）

二〇二二年度支出 二八〇、九八七円

《細目》

『北大史学』六二号・『史筵』二〇号・角5封筒  
（印刷代（含・抜き刷り代）および振り込み手数料）

二五一、五一五円

郵送費（『北大史学』・会費請求書等） 一九、六四七円

交通費（『北大史学』発送時のタクシー代） 一、七四〇円

ホームページ用サーバーレンタル料 八、〇八五円

次年度繰越金 一、四七二、七七五円

合計 一、七五三、七六二円

◎ 二〇二二年度卒業論文・修士論文発表会

（二〇二三年二月二十八日）

コロナウィルス感染防止のため、大会はオンライン形式  
（Zoom）で開催されました。

【卒業論文発表】

佐藤 拓海（日本史学）「越後守護代長尾氏の権力形成過程―室町期  
を中心に―」

野村 千晶（西洋史学）「ウィンドバンドの誕生と発展―フランス革  
命期を中心に―」

早坂 和（考古学）「縄文の丸木舟」

【修士論文発表】

出野 格（東洋史学）「『西征期』中国共産党の経済財政政策―西  
北辦事処の文書を中心に―」

高橋 陸拓（西洋史学）「道標転換運動における亡命ロシア知識人の  
「大國主義」思想―一九二二―一九二四年―」

◎ 二〇二二年度博士論文・修士論文・学士論文題目

【日本史学研究室】

● 修士論文

松本 明 「『Cカッター』の札幌農学校における講義内容の分析」

● 学士論文

足達 愉子 「占領期の性産業とその影響」

菊池 渉 「内務省警保局の映画検閲」

木須 栄寿 「米国戦略爆撃調査団資料からみる北海道空襲―室蘭と  
釧路を中心に―」

佐藤 拓海 「越後守護代長尾氏の権力形成過程―室町期を中心に  
―」

鈴木 杜顕 「郡内騒動の地域的背景と甲州道中」  
諏訪 貴之 「鎌倉殿御使」と源頼朝の西日本進出」

高橋功太郎 「古代中世移行期における刑罰体系の展開―追討活動に  
おける「降人」に着目して―」

塚本さくら 「平安時代の為政者と仏師」  
土田 知之 「播磨国矢野荘例名の領有と寄進をめぐって」

中井 美里 「古代の天皇喪葬と葬司」  
野口竜太郎 「謀略機関としての秋丸機関の検討」

日野 千春 「伊勢・賀茂斎王制度の崩壊」  
福本 大智 「細井肇の大アジア主義」

松村 澹奈 「今川氏領国における訴訟制度」  
宮坂 拓実 「軍事救護制度における傷痍軍人対策」

森田 拳介 「藤原不比等の功封とその伝世について」

【東洋史学研究室】

●博士論文

末森 晴賀「17世紀オスマン朝―ヴェネツィア間の「海賊」をめぐる海上秩序」

●修士論文

安藤 貴堯「ラガシユ第一王朝における人身売買行為」

出野 格「西征期」中国共産党の経済財政政策―西北辦事処の

文書を中心に―

佐藤 穰「帝国と共和国のあいだ―トルコ文学者ハリト・ズィ

ヤー・ウシヤクルギルの回顧録より―

彦山 明志「アルチ・ノヤン家の投下領」

●学士論文

今野 有彩「9、10世紀のアッバース朝社会における服装規範―衣服の色に注目して―」

原田 拓弥「戊戌政変の契機についての再検討」

【西洋史学研究室】

●修士論文

高橋 陸拓「道標転換運動における亡命ロシア知識人の「大國主義」思想―一九二二―一九二四年―」

●学士論文

太上淳ノ介「近世ドイツにおける共同体内部の階層対立」

脇坂奈津子「戦後イギリスにおける人種主義―一九八一年ブリクス

トン暴動と記憶―

杉原 諒「紀元前ヒスパニアにおける「ローマ化」と先住民反乱

―セルトリウス戦争を手がかりに―

阿部 亮「公民権運動期における黒人女性労働者の闘争―

一九六九年サウスカロライナ州チャールストンの病院労働者ストライキにおけるインスターセクシヨナルな要因とアイデンティティ・ポリティクスの展開について―

大嶽 航希「戦後イギリスの大衆教育―新自由主義とメリトクラ

シー―

小森 双葉「一九世紀におけるドイツ・ナシヨナリズムと音楽活動

―ベルリン、ウィーンを中心に―

田本 康大「越境し、変化するジャズ―冷戦期アメリカの「ジャ

ズ・アンバサダーズ」の活動を通して―

野村 千晶「ウィンドバンドの誕生と発展―フランス革命期を中心

に―

前田 拓海「イーノック・パウエルの（人種主義）―「血の河演説」

（一九六八年）の批判的考察―

宮崎 千鶴「近世神聖ローマ帝国における魔女裁判―糾問訴訟の展

開に即して―

小池 悠太「中世盛期フランスにおける文書活用の広まり」

寺田 奈津「「ウィーン包圍」の文化史的影響」

【考古学研究室】

●修士論文

筒井彦七郎「縄文文化から統縄文文化における人類の自然環境への

適応」

●学士論文

榎本 尚弥「岩手県宮野貝塚出土石器の使用痕分析」

高橋 乾晋「宮の平遺跡の遺跡形成と祭祀遺構」

新聞 輝之「九州地方における縄文時代のイチイガシ種実利用の研

究」

早坂 和「縄文の丸木舟」

舟木 暁「北海道太平洋岸における本土決戦陣地の考古学的研究」

## ◎ 研究室便り

### 〈日本史学研究室〉

昨年引き続き、二〇二三年春には大きな異動があった。助教の高島廉氏が北大を退職し、距離的には直近の北海道武蔵女子短期大学に講師として着任した。わずか一ヶ年度の在籍期間とはいえ、わが北大日本史学研究室、いや歴史学講座への貢献度は著しく高く、失った痛手は何より大きい。高島氏の新天地での活躍を祈る。

その代わり、本研究室で博士課程を修了した吉田拓矢氏が、講師として我々教員陣に加わった。吉田氏の専門は日本古代史、専攻分野は暦法・天文学。陰陽道官人に詳しく、史料の限られている日本古代史なので、史料を非常に大切にす。彼の授業を受ける学生は幸せ者だ。ぜひその薫陶を受けて大成して欲しい。もちろん、暦法は中国から輸入されたものだから、国際関係史とも無縁ではない。吉田氏には、広く東アジアのなかで日本の古代社会を位置づけてほしいと願う。

そして、川口暁弘氏が教授に昇任された。川口氏の貢献は大きく、ようやく教授か、という感慨である。誰しもがそうしたい思いを懐くことだろう。今後の氏のますますの活躍を祈念したい。

新二年生は十二名であった。例年よりやや少なめだが、それでも新たな若人が来てくれることは喜ばしい。そして、コロナ禍で途絶していた研修旅行が三年ぶりに復活した。この行事は我が研究室で新二年生が行なう恒例のもので、我々教員が一名付き添うことと

なっている（今回の引率者、というより追従者は筆者橋本）。今回の訪問地は広島県。細かく踏査地を挙げれば、広島平和記念資料館・宮島（厳島神社ほか）・広島城・呉市界限（呉市海事歴史科学館（大和ミュージアム）・海上自衛隊呉史料館（てつこのくじら館）・三原佛通寺・尾道千光寺・鞆の浦・広島県立歴史博物館（ふくやま草戸千軒ミュージアム）・福山城、となる。新二年生諸氏は、日を追うごとに親睦を深めていった。そして、日頃授業等で見せる顔とは違う一面が窺えたことも貴重であった。とにかく、楽しかった思い出しかない。参加者もそうであることを信じたい。

近世史の動向について記す。教授の谷本晃久氏が中心となって、昨年に引き続き八月に附属図書館所蔵未整理北方資料の調査を実施した。旧場所請負商人伊達家関連文書と旧越後高田藩士白石家関連文書で構成される史料群であることが明らかになりつつある。また、十二月には四年ぶりに松前での古文書調査合宿を再開する。今回は旧松前藩社頭家の未整理文書が対象で、松前藩政史・近世宗教社会史の新たな成果が期待される。

近代史の動向。教授の白木沢旭見氏は、二〇二三年八月、近代史専攻の専門研究員や院生有志とともに天塩町に赴いて、天塩川歴史資料館所蔵資料の第一次整理作業を行なった。戦後の農協資料・漁協資料などを中心に、段ボール箱で一六四箱分を整理した。

一方、教授の川口暁弘氏は、学部演習の一環で、九月二十三二十四日に二泊二日の定山溪合宿を実施した。幹事も含めてひとりとしてゼミ合宿を経験した者がなく、まったくの手探りであったが、参加した学生諸君は皆楽しかったようだ。温泉やイルミネーションに気をとられて肝心の文献講読が疎かになっていなかったか心配であり、後期の授業でその成果を確認することである。さてその結果や如何。

（文責・橋本）

### 〈東洋史学研究室〉

本年十月現在、東洋史学研究室は、教員三名、大学院・博士課程五名、修士課程二年生四名、一年生二名、研究生一名、学部・四年生六名、三年生一〇名、二年生五名、学振特別研究員RPD一名の、計三十七名で構成されている。

文学部・文学院ともに、すでにコロナ規制は解除され、学内のすべては二〇一九年以前の状況に戻った感があり、誠に喜ばしいことである。

本研究室と海外との関係においても同様である。二〇二三年度夏季のサマーインスティテュートでは、モロッコからアブドゥッサラーム・シャッターデーイー氏をお迎えし、集中講義には多くの院生・学部生が参加した。コロナ禍の中に留学へと旅立った博士課程三年生の高橋稜央氏も、無事スペインから帰国した。院生・学部生の中には、トルコ、ボスニア、ヨルダン、台湾に史料調査や短期留学、観光旅行に出かける者も次々と現れており、頼もしい限りである。ただし、かつて本研究室で盛んであった中国への渡航や留学については、もう少し時間がかかりそうである。ロシアへの語学留学を望んだ学部生も、キルギスに行き先を変えた。ともに中露に関係する国際情勢、現地の社会事情によるものである。今やイスラエル周辺もまた危うくなりつつある。東洋史学が学問として抱える地政学的リスクを意識せざるを得ない。

その他、本研究室関連のニュースとしては、長年にわたり研究室に多くの貢献をしてくれた末森晴賀氏が博士号を取得し、東京外大受け入れの学振特別研究員PDとして新天地へと向かったことを特記しておく。また、吉開がサバティカルを取得した二〇二三年度前期には、研究室OBの鷺尾浩幸氏が非常勤講師を担当してくれたことも記録しておきたい。

なお本研究室では、太田敬子教授の急逝以来、その欠員補充を執行部に強く求め続けてきたが、先頃ようやく新規教員の採用枠が与えられ、公募を経て、目下選考作業中である。次号の本欄では、三人体制の終了と、四人体制の始動について、皆さんに無事報告できるようになることを願っている。(執筆担当：吉開)

### 〈西洋史学研究室〉

本年度の西洋史学研究室は、教員六名(山本先生含む)、専門研究員一名、院生十一名、卒論執筆年次生十七名、三年次生九名、二年次生十五名の総勢五十九名となりました。博士課程在籍者が少ないという長年の懸案事項はありますが、おおむね安定した状態と考えます。

さて、西洋史学研究室では、教員スタッフに大きな変化がありました。この数年、当研究室の教授と本学の副学長の「二足の草鞋」を履いてこられた山本文彦先生が、本年度からは副学長として本学の運営と改革の推進に専念することとなり、すべての講義とゼミから退かれました。山本先生は、これからは副学長職にある限り、「そちらにフルコミット」となりましたが、先生の献身ぶりと成し遂げた成果において、資金総長からの信任も特段に篤いとのことです。今回、研究室の枠組みの中で、山本先生と顔を合わせながら、学び、働く機会が失われたことは、西洋史学としては寂しくかつ残念なことです。ですが、北大の将来を考えれば、ぜひ先生には後顧の憂いなく副学長としてのお仕事に邁進していただきたいと、笑って送り出すべきであると思っております。なお、山本先生は西洋史学研究室から外れたのではなく、籍は研究室に残っております。先生が、もし定年までに副学長から外れることがあれば、研究室に戻って授業を担当なさることもできるとうかがっております。

さて、山本先生が副学長職に専念なさることとなり、ご担当だった西洋中世近世の授業・ゼミはどうなったかという点、優れた新任教員によってすでにリスタートが切られています。本学の輩出した西洋史学研究者の中でも、その力量で学界に北大の生んだ逸材として知られる安酸香織先生が、日本大学国際関係学部の助教から転ずる形で、本年四月に講師として西洋史学研究室に戻ってこられました。先生は、山本先生の授業・ゼミをそのまま引き継ぐ形でのご担当となりましたので、ご本人には重圧もあったと思いますが、移行はスムーズであったとのこと幸いです。(執筆・松島)

#### 〈考古学研究室〉

二〇二二年度の考古学研究室の構成員は、教員三名(文学院に参加している他部局所属の教員を合わせると総数六名)、博士後期課程三名、修士課程五名、学部生八名の計一九名です。

豊浦町の礼文華遺跡発掘調査(第十二回)を、今年も予定通り実施できました(二〇二三年八月二五日〜九月一七日)。期間中、礼文華小学校児童の体験発掘、礼文華遺跡での一年生向けの授業である一般教育演習(フレッシユマンセミナー)もあわせて実施しました。豊浦町での実習は今年が最終年度となります。豊浦町教育委員会・豊浦町役場、豊浦町郷土研究会・礼文華地区の方々には、小幌洞窟遺跡の調査を開始した二〇〇六年から一八年間のながき関わって全面的にバックアップしていただきました。この場を借りて、あつく御礼申し上げます。この後、最終的な発掘調査報告書を刊行し、資料を地元で有効に活用していただきたいと願っています。小杉教授は、科研「縄文文化」『続縄文期』における海獣狩猟集落の研究」と考古学実習・考古学特別実習として実施してきた礼文華遺跡の発掘調査報告書の作成に向けて一年を通して資料整理・分析

に取り組みました。合間に『考古学研究室研究紀要』第二号の編集を終え、無事刊行しました。文学院教員として大学院教育に参画している中澤祐一助教も執筆陣に新たに加わりました。また一般財団法人北海道開発協会発行の広報誌「開発こうほう」で二〇二二年八月号から一年間にわたって連載「北海道で！縄文を知る・縄文世界遺産へかかってにフットパス」(十二回)を考古学研究室と北大埋蔵文化財調査センターの教員を執筆陣にして企画しました。北海道の縄文文化の紹介と道内にある縄文世界遺産の七遺跡を最寄りのJRの駅から歩いた紀行文とで構成、歩行の累計踏破距離は二〇〇キロメートルを超えました。

高瀬教授は、二〇〇三年七月に遠軽町で行われたInternational Obsidian Conference Engaru 2023の発表を行うとともに、実行委員会のメンバーとして会議の運営に携わりました。研究面では自らが代表をつとめる科研費で遺跡出土動物骨の同位体分析を進めたほか、他のプロジェクトの分担者として奥尻島青苗遺跡でのフィールドワークや道南での資料調査などを実施しました。欧米の大学からの大学院生の受け入れも昨年よりも増え、五名程度が北海道で実施する研究をサポートしました。

國木田准教授は、二〇二〇年度から引き続き「土器の年代と使用法の化学的解明」(学術変革領域A)の研究プロジェクトを行っています。今年度からは、新たに「生業動態からみた擦文文化の分布拡大要因」(基盤研究B)を開始しました。この他に、シブノツナイ竪穴住居群(湧別町)調査検討委員会への出席や、二〇二二年度縄文遺跡群ボランティアガイド養成講座(十二月)の担当、「北海道における縄文世界遺産の拠点機能のあり方に関する懇談会」の構成員を務めました。

今年の考古学研究室からは学部卒業生五名、修士修士生一名が巣

立ち、それぞれ希望の進路へと進みました。北大での経験をいかして、社会で活躍してくれることを期待しています。（文責：高瀬）

